

慊堂日歴に見ゆる經籍

森 鹿 三

江戸末期に編纂された經籍訪古志は當時我が國に現存

する漢籍を及ぶ限り著録したもので、寛平年間に藤原佐世の撰した日本國見在書目錄と共に後世學者の珍重する漢籍目錄である。經籍訪古志の多紀菫庭の跋及び森枳園の書後に據ると、この書は菫庭が懲愆して澁江抽齋・森枳園・海保漁村・伊澤柏軒・堀川舟庵の輩に編纂させたものである。この人達は毎月一二回豫め夜を下して本所緑町なる菫庭の別荘に集まり、一同環坐して古本を披閱し論定した。それが了ると宴を開き各々醉に乗じて歸り二州橋上に月を踏み詩を詠じたのである。枳園の書後は明治十八年に記されたものであるが、この古書論定會を

催してゐた三十年前の事を回顧して「當時遷卒の警・馬車の轟なし、光景今日と大いに同じからず」と感慨を洩らしてゐる。

此書の成つたのは前述の如く多紀菫庭が澁江・森等の人達を懲愆したに起因するが、古書を披閱論定することはその以前から行はれてゐた。菫庭の跋に次の如く述べてゐる。「余平生他好なし、刀圭の餘暇たゞ古本を癖嗜す、壯歲迷庵・掖齋の諸老と遊び徧くその藏する所の舊笈を閲す、又寶素・蘭軒と交り相與に書の雅俗を鑒別す」と。茲に列學された市野迷庵・狩谷掖齋・小島寶素・伊澤蘭軒の在世の時期を考へると大體文化文政の頃である。その後同好も日々に稀となり古本も日々不明になつて行つたので、昔を追懷して悵然に堪へず、さきの諸子

に從憑して此書を作らしめたと云ふ。この跋は安政三年に書かれた。(時に菫庭六十二歳である。)市野迷庵の歿した文政九年より數へて丁度三十年である。しからばこの間に於ける古書會の消息如何といふに、零碎ながら二三の手掛かりがある。三村清三郎氏の輯録された掖齋の書簡集(掖齋華賤と題し日本藝)に

今日例の古書會致し申候晝後より御來駕可被下候以上

廿五日

狩谷 掖齋

養竹様

といふ養竹即ち森枳園宛の手紙が載つてゐる。是に由れば何時の頃か掖齋枳園等の古書會が催されてゐたのである。更に想像すれば、廿九日、七廿五、六月□□□附枳園宛の手紙もこの古書會に關係するものかも知れない。又た森鷗外の「伊澤蘭軒三二三に鹽田氏の次の如き話を載せてゐる。

榛軒^①・柏軒の兄弟は澁江抽齋・小島抱沖^②・森枳園の三人と共に狩谷掖齋の家に集まつて古書を校讀した。その書は多紀菫庭を介して紅葉山文庫より借り來つたの

である。當時一書の至る毎に諸子は副本六部を製した。それは善書の人を倩つて原本を影寫せしめたのである。この六部は伊澤兄弟一部、澁江・小島・森・狩谷各一部であつた。

この古書校讀會はさきの掖齋より枳園に宛てた手紙に云ふ例の古書會に當るものである。その時期は明らかでないが、この會同人の年齢及び掖齋の歿したのが天保六年であることから考へて、文政天保頃の事と思はれる。因みに天保六年に於けるこの古書會同人の年齢を調べると、伊澤榛軒が三十二歳、同柏軒が二十六歳、抽齋が三十一歳、抱沖が七歳、枳園が二十九歳である。この古書會の爲めに紅葉山文庫の貴重書を借出す勞を執つた多紀菫庭は四十一歳であつた。この中で抱沖が七歳といふのは何としても訝しい。恐らく抱沖の父寶素の誤ではなからうか。もし寶素とすれば天保六年には三十九歳であつた。寶素は前に引用した菫庭の跋に見ゆる「相與に書の雅俗を鑒別した」人であるが、經籍訪古志の附言に「この書の編録は端を狩谷掖翁在すの日に發す、凡そ鈔刻の源

委流別を辨ずるは之をその指授に得る者多しとなす、その後小島君寶素、又屢々搜討を加ふもなほ未だ完からず」とあるに據つてこの人が古書會の同人なること明らかである。經籍訪古志編纂の發端をなす文政天保頃の古書會同人中まづ天保六年に狩谷棧齋逝き、嘉永元年に小島寶素、同五年に伊澤榛軒が歿した。菫庭が經籍訪古志の編纂を慫慂した頃には、昔の古書會の同人は半に減じ柏軒・抽齋・枳園が當時在世してゐた。海保漁村の訪古志序に據ると菫庭が抽齋・枳園及び小島抱沖に慫慂して目錄を撰成せしめたといふ。抽齋・枳園の訪古志附言にも「菫庭が余等二人にこの仕事を督促したが、寶素の嗣子抱沖を獲てその得る所の庭間を互相攷證した。用功の精密なること余等二人に倍徙したので久しからずして緒に就いた」とあり、殊に後述する如く抱沖自ら記した初稿本訪古志の紙帙に、「この古書觀賞會に尙眞も與つた」と明言してゐるのである。然るに前に引用した枳園の訪古志書後には抱沖に言及してゐない。之は恐らく脱落であらう。抱沖は古書會の同人であつた父寶素より得た庭間を以て

この訪古志編纂者の列に加はつたのである。附言に據れば伊澤柏軒も亦父蘭軒より聞いた所を以て相商權した。

海保漁村はその出來上つた原稿を添削し、堀川舟庵は校讐の勞を執つた。五年前、日本書誌學會より公刊せられた安田文庫現藏の初稿本經籍訪古志の紙帙には「嘉永王子茂綠汀の藥院に會し古刻舊鈔善本數種を賞觀し併せて此書を編輯す、同輯の者三人、澁江抽齋・森立夫・堀川舟庵なり、尙眞も亦與る、尙藥三松先生校閱し老儒海保漁村讀過、批評を加ふ云々」と云ふ。之は小島抱沖（尙眞）の記す所である。壬子は嘉永五年、綠汀の藥院は本所綠町なる菫庭の別莊、三松先生は菫庭である。通行本に見える菫庭の訪古志跋は安政三年に記してゐるが、その四年前の嘉永五年には古書の論定會が催され訪古志の編輯がなされてゐた事を知る。附言にいふ如くその後三度稿を易へて安政三年の序跋ある訪古志となつた譯である。初稿本訪古志の紙帙に「安政二年仲冬淨寫此書第三稿」とあるから第三稿は安政二年には出來上つてゐた。棧齋に端を發したこの古書著録の事業は彼の歿後二十年

にして見事に結實したのである。長澤規矩也氏の初稿本訪古志解説に據ると、初稿本及び再稿本は安田文庫、三稿本は瀧川龜太郎氏が現藏するといふ。

以上粗雑ながら江戸末期に於る本邦現存漢籍目錄編纂事業を略敘したのであるが、その當時やはり現存漢籍に關心を有つて居り前に擧げた古書會の諸子とも交渉のあつた人に松崎懺堂がある。掖齋とは殊に親しい交りをしてゐた様で、互に談論に耽つてはその家に泊つて行くといふ風であつた。掖齋の和名抄訂本も懺堂と日を定めて校讀したのである。その他儀禮・爾雅・説文等も二人で校讀してゐる。儀禮を校讀した際は澁江抽齋・伊澤柏軒なども側に在つて聽いてゐたのである。掖齋との親交が縁となつて、掖齋を棟梁と仰ぐ考證派の人々も懺堂と往來するやうになつたのであらう。表題の懺堂日歴は文政六年より弘化元年まで二十年間に亙る懺堂の日記であるが、その中には掖齋一派の人々の事も豊富に記されて居り、此等の人々が特に心を潛めた我が國に見在する古刻舊鈔の善本に就いても詳細に書留めてゐる。従つてそれ

らの記事を抽出して經籍訪古志と照合せば、互に疏通證明する處が少くないのである。それで完備を保證し得ないが、今春日歴を讀過した際に抽出して置いた經籍に關する記載を、訪古志の順序に従つて排列し一般の參考に供したいと思ふ。日歴の原本は岩崎氏靜嘉堂文庫現藏、その活字印本は『日本藝林叢書』に收められてゐる。本文の引用はすべて活字印本に據つた。

註① 多紀崑庭 名は元堅、字は亦柔、通稱は安叔、崑庭はその號である。三松とも號した。桂山の子、柳泚の弟である。寛政七年(皇紀二四五五)に生れ安政四年(二五一七)に歿す。享年六十三。

- ② 森積園 名は立之、字は立夫、積園はその號。文化四年(二四六七)に生れ明治十八年(二五四五)に歿す。享年七十九。
- ③ 澁江抽齋 名は全善、字は道純、抽齋はその號。文化二年(二四六五)に生れ安政五年(二五一八)に歿す。享年五十四。
- ④ 海保漁村 名は元備、字は純卿、漁村はその號。寛政十年(二四五八)に生れ慶應二年(二五二六)に歿す。享年六十九。
- ⑤ 伊澤柏軒 名は信重、字は任甫、通稱は磐安、柏軒はその號。蘭軒の子、椿軒の弟。文化七年(二四七〇)に生れ文久三年(二五二三)に歿す。享年五十四。
- ⑥ 堀川舟庵 名は濟、舟庵はその號。その生卒年を知らない。

⑦ 市野迷庵 名は光彦、字は俊卿又子邦、初め質窟、後迷庵と號す。通稱は三右衛門。明和二年(二四二五)に生れ文政九年(二四八六)に歿す。享年六十二。

⑧ 狩谷掖齋 名は望之、字は卿雲、掖齋はその號。通稱は三右衛門、屋號を津輕屋といふ。安永四年(二四三五)に生れ天保六年(二四九五)に歿す。享年六十一。

⑨ 小島寶素 名は尙質、字は學古、通稱は喜庵又は春庵、寶素はその號。寛政九年(二四五七)に生れ嘉永元年(二五〇八)に歿す。享年五十二。

⑩ 伊澤蘭軒 名は信恬、字は禮甫、通稱は澗安、蘭軒はその號。安永六年(二四三七)に生れ文政十二年(二四八九)に歿す。享年五十三。

⑪ 伊澤榛軒 名は信厚、字は朴甫、通稱は長安、榛軒はその號。文化元年(二四六四)に生れ嘉永五年(二五一一)に歿す。享年四十九。

⑫ 小島抱沖 名は尙眞、通稱は春沂、抱沖はその號。寶素の嗣子。文政十二年(二四八九)に生れ安政四年(二五一七)に歿す。享年二十九。

⑬ 松崎儼堂 名は復、字は明復、儼堂はその號。明和八年(二四三一)に生れ弘化元年(二五〇四)に歿す。享年七十四。

⑭ 三村氏所藏澁江抽齋手記(審誌學四卷六號所載)に箋注和名抄の稿本初稿は文政五年正月に起草、翌六年四月終業、二稿は文政七年の比とあり、三稿は何年か記してゐない。或

は文政八年の比であつたらうか。儼堂と校讀したのはその翌九年以後である。儼堂日歴文政九年正月八日の條に「狩谷卿雲來、校正和名抄、遂宿」とあるのを初見とし、それから原則として毎八の日に掖齋は儼堂を訪ねこの書を校正してゐる。文政十年八月廿八日の條には「校和名抄、七卷畢」とあるまで前後二十數回に及んでゐる。この年十月五日より十二月三日まで掖齋は上方に旅行のため和名抄、説文の校讀は暫く中止、翌年四月八日からまた始めてゐる。文政九年小重陽の條に「與掖齋翁校定其所著和名抄訂本」とあるから和名抄の本文のみの校訂をし、注釋には及ばなかつたのであらうか。箋注の方は掖齋歿後、澁江抽齋等が儼堂の許で校訂したこと明らかである。日歴天保十二年三月八日の條に「澁江道純來、校掖翁倭名抄注釋」とあり、以降八の日毎に校訂してゐる。掖齋と儼堂が共に説文を讀み始めたのは日歴によると文政十年六月廿九日からである。その十日前の十九日から開始する豫定であつたが、掖齋の都合で廿九日より始めることになつたのである。掖齋華腹に六月十二日附儼堂宛の手紙があり、年は不明であるが、その内に掖齋所藏の玉莽の威斗及び多度寺資財帳の題簽か跋尾か知らぬが、八分で染筆する様依頼してゐる。それに相應する如く日歴文政十年六月廿三日の條に「赴月堂、託老侯銅斗題簽資財帳題簽」とあれば、この手紙は文政十年六月十二日のものと判定する。因みに威枿説と影離多度寺資

財帳後記は三村清三郎氏編「掖齋文集」(管誌學四卷六號)に收む。この手紙には續いて

十八日參上可仕存居候處無據用事有之不能其儀候依之廿八日拜走可仕候兼而は十九日説文の積に蔭山君へも御約申候處右の次第故廿九日よりと御序に被仰通可被下候云々

とあるのによつて、説文校讀は文政十年六月十九日に開始の豫定が廿九日になつたことが判るのである。誠に日歴を見ると、廿八日に「掖齋來、校書如例、遂宿」とあり、翌日に「同讀説文」とある。手紙の蔭山君とは日歴に陰山景平といふ人であらう。天保四年四月十九日に歿した。この説文會には村山月汀も參加してゐる。日歴に記す如く八の日に掖齋來つて和名抄を校正し、その夜は懺堂の家に泊り、翌九の日は説文を讀むのが例であつた。八の日に都合の悪い時は掖齋から懺堂に酒一壺を饋つたりなどしてゐる。爾雅の校讀は文政十三年二月六日から散見する。

⑮ 日歴天保三年四月十八日の條に「掖齋與道純(即抽齋)磐安(即柏軒)來、村山生來候、俱讀士冠禮正經」とあるのを始めとして以降八の日に儀禮の校讀が行はれてゐる。その前三月十八日と四日八日に李如圭の儀禮釋宮を讀んでゐる。鴨外の隨軒傳二百に柏軒の日記を引いて「三月十八日、如羽根澤懺堂先生之家、掖齋先生與懺堂先生讀李如圭釋宮、澁江全善、信重在側聞之」といふ。當然の合致ながら姪し

い記事である。その月の六日に柏軒が始めて懺堂を見た。その事も日歴及び柏軒の日記に見える。

⑯ 拙稿「懺堂日歴に見ゆる贅川桃年の事ども」(東洋史研究五卷五號)参照。

二

經部易類 足利學校所藏古經○書寫本周易三通、二通

三冊○活字本周易一通○宋板本周易正義一通十三本(天保五・十・二十一)。周易紹興本(天保五・八・二十二)ここに周易正義といひ紹興本といふのは、訪古志の周易注疏十三卷南宋藥本足利學藏に相當する。易古鈔十四卷本有數本、字様不同云々(天保十三・八・十七)は訪古志に擧ぐる十四卷本六通共に行款を異にしてゐるのと相應する。

周易正義十四卷○右古鈔本、間存、予嘗得一本、今歸靜勝書庫、所知又有二本(天保十三・九・二十一)この所知又有二本とは別の所で易古寫、掖、澁道純(文政十三・二・十六)と言ふ如く掖齋と抽齋との所藏する單疏本をさすのであらうか。共に訪古志に著録する。周易十四卷、匡郭長七寸一分、幅五寸一分、八行々十九字、疏雙行々十

九字(天保十三・八・十七)は訪古志に周易注疏弘治永祿間影鈔宋本昌平學藏に當るやうである。周易會通、至元二年翠岩精舍新刊、學校本(天保十三・十・十六)は訪古志の周易傳義十卷に當るのであらうか。

書類 足利學校所藏古經○書寫本尙書三通、晁云一通三本、二通孔傳一通正文○活字本尙書一通○宋板本正義一通十三本(天保五・十・二十一)書紹興本、書宮崎(天保五・八・二十一)この内書寫本の孔傳に就いては更に詳しく次の如く記してゐる。

璞輔書至、十月九日發、尙書僞古文字如考文所載、二冊分爲十三卷、第一卷古文尙書堯典第一□書孔氏傳、第二卷尙書卷第二、古文尙書大禹謨、第三□書孔氏傳、以下每卷皆同式、卷尾經注既盡、隔一行古文尙書卷第幾、其下雙行記經幾字注幾字、其後有寒松印記、第一卷首加別紙二葉、有三要札記、以下終十三卷經注間皆有札記、係三要手書(天保十三・十一・二十三)

璞輔は姓山井、舊姓渡邊、衡園の遺兒。懶堂に養はる。天保十三年七月廿二日江戸を發し足利學校に赴く。寒松の

印記は足利學校祕本書目にも模糊不辨と注してゐるが、當時は判然と讀めたのである。□は僞古文字の尙字である。書宮崎とは伊勢豐宮崎文庫藏の尙書孔氏傳であるが、懶堂はこの書を鈔寫刊行しようとして考へてゐた。(天保十三・九・二十一)擬刻五經注正義及び天保十三・十・二十九御板三經注及正義の條參照)又「宮崎文庫古文尙書、山田奉行金森山城守來月六日出發、内々取計江戸へ可指下」(文政十三・八・二十一)といふ話も載せてゐる。次に書孔氏傳寫本 梅洞先生懇所授於羅山先生也(天保四・

十七)

と云ふは訪古志の尙書孔氏傳林羅山手鈔本昌平學藏に當る。楓山官庫藏の單疏本尙書正義は文政十三・二・十六、天保十三・八・十七、同九・二十一、同十・二十九に見える。前掲足利學校藏の尙書正義(紹興本ともいふ)の事は天保五・八・二十二、天保十三・八・十七にも見える。

尙書經傳音釋六卷序一卷附宋鄭東鄉尙書纂圖元至正刊本、後有至正辛卯□夏德星書堂重刊本記(天保十二・十二・廿九)

右の書は所藏者を記さぬが訪古志には小島寶素及び昌平學がこの音釋を藏してゐると記す。

詩類 足利學校所藏古經○書寫本毛詩二通各八冊、宋板本正義一通十本(天保五・十・二十一)詩附釋音刻(天保五・八・二十二)この附釋音本に就いては天保十三・八・十七及び九・二十一にも見ゆ。

禮類 儀禮單疏、文章生英房寫本、東寺觀智院藏(天保三四・廿七)、儀禮注疏、明汪文盛等編校、十行廿字(天保九・七・十九)宋本巾箱本周禮、正宗寺藏書也(天保十三・八・十七)璞甫致巾箱校本周禮一卷……周禮校本自足利來、(天保十三・十一・六)足利周禮、附釋音刻(天保五・八・二十二)足利學校所藏古經周禮二冊重言本(天保五・十・廿二)上の四條は訪古志に周禮鄭氏注足利學藏といふもの、もと正宗寺の藏。白川侯使其用人矢野半左衛門來囑周禮岳本校刻事(天保十三・九・二十四)その事は天保十三・十・二十九經注の條にも見ゆ。足利學校所藏古經○書寫本禮記一通十冊○活字本禮記一通、足利只有禮記○宋板本禮記正義一通三十五本(天保五・十・二十一)、この正

義即ち越刊本注疏の事は禮記紹興本(天保五・八・二十二)の外、天保十三・八・十七及び九・二十一にも見ゆ。陳澧禮記集說、天曆戊辰建安鄭明德宅新刊、木記與經籍跋文者同(天保十三・十・四)この禮記集說と孟子注疏古寫本とが足利校目錄に失載せる事を報じた九月廿七日附の璞輔の手紙がこの日に達したのである。

春秋類 足利學校所藏古經、左氏傳經注印本一通○活字本左傳一通○宋板本正義一通二十五本(天保五・十・二十一)左傳附釋音刻(天保五・八・二十二)この附釋音本に就いて別の所では左の如く記してゐる。

版式字體同毛詩附釋音本、惟每行十七字爲異、序後有建安劉叔剛父鋟梓隸字木記、又有桂軒、藏書、敬齋、高山流水四篆印(天保十三・八・十七)

父の字は毛詩では宅に作る。四篆印の内、桂軒及び藏書は鼎形、敬齋は鬻形、高山流水は琴形といふ。(天保十三・九・二十一)次に正義單疏本に就いては

春秋正義古鈔三十六卷、天文年間所寫、金澤文庫本、藏于常州久慈郡壇井正宗寺、事見口華集、(天保十三・

八・十七)

とある外、文政十三・十六、天保十三・九・二十一、同年十・二十九にも見える。懺堂はこの本と金澤文庫舊藏春秋經傳集解の影刻を常に唱導してゐた。この金澤本の事はやり天保十三・九・二十一、同年十二・二十九に見える。

所校左傳古板第二十二尾墨記云、時文安元年云々而板樣頗舊、其刻時可想、文安元年去今三百九十七年(天保十・十一・十)

と云ふのは訪古志の「求古樓(即掖齋)所藏本卷尾有文安年記」に合致する。嘉定本左傳不見(天保十三・十一・二十三)、左傳嘉定六年江公亮跋本(天保十三・十・十六)とは訪古志の春秋經傳集解宋嘉定癸酉刊本足利學藏に當る。

公羊傳單疏本、足利學校藏、羅山先生以校家本、東行藏本云借寫(天保十三・二・廿四)は訪古志に見えぬ。尾藩藏公羊正義寫本(天保九・九・十九)は訪古志に春秋公羊傳十二卷舊鈔本尾府藏とあるのに當るやうであるが、一は正義、一は何休注であつて孰れが是なるか知らない。天保九・六・二十九に小島君喜庵來、示公羊傳影宋余氏本とあり、翌月四日には詣掖齋墓、告船載公羊傳余本事とある。

七月四日は掖齋の祥月命日である。懺堂は毎年この日には掖齋の墓に詣でてゐる。之からもその生前の親交が偲ばれるのである。同月七日には書肆玉岩堂でこの書を見ている。

赴掖齋不在、以穀梁傳影抄二冊附主人(文政八・五・十)

柴碧海來、三日前事致穀梁傳影抄四十紙(文政八・五・十)

就掖齋取一金、爲穀梁贖費(文政七・閏八・二十五)

柴碧海來、穀梁抄本既成(文政九・三・三十)

赴柴碧海、別附穀梁寫金二丸(文政九・四・十四)

右に列學した穀梁は訪古志の春秋穀梁傳宋粟本の條に、此本係粟學士邦彥舊藏、往年狩谷望之與松崎明復謀、就阿波國學傳一書生影鈔、毫髮盡肖、宛然如宋粟、今猶藏在求古樓、

とあるに據つて余仁仲刊本なるを知る。柴學士邦彥は柴野栗山であり、この本を贖寫した碧海は栗山の養子である。訪古志の傳へる所が正しいとすれば、掖齋が贖寫を

依頼した頃には阿波侯の所蔵になつてゐた譯である。この本は栗山の手を放れてから一旦書肆の有となつたらしく、椽齋の舊鈔本周禮跋(書誌學四卷六號所載三村氏椽齋文集による)に「予嘗見紹熙辛亥建安余仁仲所刻谷梁傳於今川橋書舖、聞今歸阿波侯」と言ふ。かゝる因縁でこの本の對をなす公羊傳が舳載された事を惟堂は既に故人となつた椽齋に告げたのである。誠にほゞゑましい情景が想像される。然もこの二本の覆刻が企てられかけたのである。天保十三・九・二十四の條に

早聞、濱松相公使毅侯來問藏刻事、余答以余仁仲所校刻毅梁公羊二傳、且附毅梁傳去、

とある。前述の如くこの日は白川侯が用人矢野半左衛門を遣し周禮岳本校刻の事を委嘱したのである。それで惟堂は「今日何日、使二經就板以永傳後世、喜不可支也」と満面に欣びを湛へてゐる。

孝經類 足利孝經(天保二・八・二十一)は訪古志にいふ舊鈔單經本である。伊澤長安書、致弘安本孝經十二通(天保八・四・十五)伊澤長安來、還古文孝經四通(天保九・二・

十八)は福山侯阿部氏の影模した弘安二年鈔卷子本であらうか。後の四通は或は椽齋所蔵の舊鈔本四通を指すのかも知れぬ。隋劉炫孝經孔安國序直解(天保二・八・二十一)は訪古志によると椽齋の藏する所である。

椽齋來、話爲刻孝經事(文政九・十二・五)

椽齋至、贈新刊孝經八部(文政十・四・五)

椽齋使人來、饋孝經十(文政十一・五・二十九)

之は椽齋所蔵の北宋栗本御注孝經である。訪古志にも「文政九年狩谷望之翻雕以行于世」といふ。

論語類 赴佐倉、以阿佐井野本有宣幸(賢)論語、爲選官

賀(天保八・八・二十)は訪古志の天文癸巳阿佐井野刊單經

本に當り、津藩丞相本論語(天保十三・八・十七及び八・二十)は訪古志の集解舊鈔卷子本津侯藏に當る。古寫本論語椽齋、此類可搜(天保八・五・二十九)は訪古志によると椽齋が應永九年鈔卷子本はじめ數通の古寫本を有つてゐたことを指す。宗重聊論語(天保八・五・三十)はその應永鈔本のことである。正平本論語(天保十三・八・十七)及び塚本論語(天保十四・正・二十四)に就いても記してゐる。

が、後者は杉本望雲が得來つて示したものである。懺堂は「余閱此本多矣、此爲最好」と言ふ。論語義疏、五山僧札記、付於古止點、有睦師印記(天保十三・十一・二十三)は訪古志によると足利學校の藏書である。義疏論語(天保十三・十・十六)も足利本である。

孟子類 加賀侯所藏の趙岐注本は、趙注孟子卷軸本、加州金澤、小島春庵(卽寶素)云(天保十・七・八)を始め天保十三・九・二十四、同二十六、同年十・四に見える。孟子、長享二年寫本(天保十三・十・十六)長享本孟子七册係孟子單疏、每卷記與之天輔置(天保十三・十一・二十三)は足利學校の所藏である。

是日使文蔚赴伊澤氏取弘隆寺本孟子、不在空遺(天保十三・十・四)

訪箔屋町伊澤磐安、磐安不在、以現在書目孟子興隆寺本屬内人(天保十三・十・十五)

赴佐野講、講終謁參政、勸刻弘隆寺本孟子(天保十三・十・二十四)

この弘(又ハ興)隆寺本とは訪古志に每册末に廣隆寺總持

院の印ありといふ椽齋所藏の舊鈔本である。磐安は柏軒その内人は椽齋の女たかである。孟子注疏古寫本、在上覽本内(天保十三・十・四)は訪古誌には別書の如く記してゐるが、實はさきの長享本孟子と同一書である。なほ活板四書の事が天保十・十二及び天保十二・五三に見える。

小學類 爾雅に關する記載には大字本爾雅石川長門介藏覆蜀本五山所刻(天保三・閏十一・三十)椽齋書來、致大字本影抄爾雅(天保四・五・八)今三角氏所藏大字本爾雅、蓋南宋時覆刻北宋蜀本(天保十一・四・十)がある。急就篇については急就章玉烟堂帖本又錄一本(天保七・十・六)讚岐某寺藏大師急就章真迹、世傳其摹本、狩谷椽齋授小島五一、此本據太宗艸書、顏監所釋頗誤、高野無量壽院語(文政十二・六・二十八)あり、特に後者はその後屢見する。天保九・三・九には終日貫名子より贈られた空海書急就章を讀み玉海本と對校してゐる。貫名子名は苞、通稱泰次郎、その前日懺堂を訪ひこの書を贈つたのである。

玉篇に關しては古本玉篇殘本有八卷、十無盡院語粟原(天保十・九・十六)玉篇言部一葉(天保五・九・十)相公、玉篇影抄本(天保七・七・十)。無量壽院所聞、梅尾山聖教日錄略抄(九十六番)玉篇一部、(百一番)玉篇一部二帖などに見ゆ。韻書に關しては唐韻五卷(天保五・九・十)〔梅尾〕經藏華嚴私記背寫唐韻(天保十・九・十二)唐韻全本藏於某寺、無量壽院云(天保七・六・二十一)集韻宋本、佐伯侯書庫、當託冠山、假之求古樓(天保九・七・二十六)などの記事がある。

三

史部正史類 河渠書、貫名省吾藏、藤公次平之弟有跋(天保六・三・十五)訪古志に史記零本一卷、舊鈔卷子本、京師□□現存河渠書一卷とあるもの。次平は時平の誤、時平の弟とは忠平を指す。貫名省吾は前節急就章の條に述べた貫名苞である。この書は今京都神田氏の所藏、羅振玉がかつて影印した。梅尾山聖教日錄略抄、史記二卷(天保七・七・十五)は訪古志の史記零本二卷舊鈔卷

子本高山寺藏に當る。文政十・十二・十五及び天保十一・六・五の宋板史記は有名な黃善夫本である。天保四・十・十七にも見ゆ。その扁鵲傳だけを多紀草庭が影抄したところがある。(天保十二・八・二十九)

史記扁鵲傳米澤本、僧一惠手筆處々有之、大高元哲親見(天保十一・正・三十)は足利本の誤ではないかと思ふ。

史記索隱佐伯本(天保四・十・十七)は訪古志の史記元麁本昌平學藏に當る。尾張眞福寺藏唐鈔本漢書食貨志は天保二・四・二十三、同七・八に見ゆ。文政十・十二・十五には黃善夫刊漢書、文政十・十二・十一及び天保十二・四・六には嘉靖板漢書を記す。漢書宋景文公本、前田慶次校(天保十二・五・二十五)も黃善夫本である。天保十・三・十一には

米澤穢多柴屋、曾私匿謙信免禍、今居蒲生町、家藏紹興板後漢書

といふ奇聞を載せてある。文政六・八・二十には嘉靖板後漢書を記す。米澤本の史記、漢書、後漢書三史の傳來を記して

紹興板三史、直江山城從征韓役、云與取不知人之首、

不如得佳書、爾時所得、今藏於米澤學中、余嘗於加藩

得看史記(天保十一・正・二十六)

といふ。天保十二・五・二十四には(伊藤)達甫來、付宋本

三史、向米澤邸、問彼本異同とある。紹興板三史の零本

は掖齋も所藏してゐた。(天保十二・四・六)天保十三・七・

廿九に長安即ち伊澤榛軒の齋した宋本前漢二、後漢一は

掖齋の舊藏書と思はれる。天保十二・五・十八には嘉靖板

三史の事を言ふ。入俊卿宅、言三國志事(文政九・十一・

五)の俊卿は市野迷庵であるから、この三國志は彼の所

藏せる宋槧本を指すのであらう。東福寺所藏の舊唐書は

よほど關心があつたらしく左の如く屢々日歴に現はれ

る。

舊唐書宋人寫本、可申遣京師(天保三・閏十一・三十)

舊唐書影抄、一二册(天保三・十二・二十三)

舊唐書邦人影抄宋本、宋諱皆缺畫、東福寺中靈雲院藏、

小缺(天保四・正・二十九)

舊唐書、東福寺塔中龍眠庵藏、鄧林和尚既死、和尚云

南禪寺猶藏宋板(天保九・五・二)

舊唐書、東福寺塔頭龍眠庵藏、前往鄧林和尚今寂、和

尚云、南禪寺藏宋板本、相馬生話(天保十三・九・二十

七)

舊唐龍眠庵本(天保十三・十一・六)

嘉靖板五代史の事は天保十一・五・七に見ゆ。天保十三・

九・二十八の條には新見公所藏の元板胡三省注資治通鑑

を影刻せん事を勸む。津藩に於て陳仁錫本を補刻するも

決して重複の嫌なき事を陳辯す。新見公所藏の通鑑は卷

五十一より五十三に至る殘卷一册である。(天保十三・十

十)

別史類 求古樓殘書估目、東都事略宋板廿五兩(天保

八・十二・二十六)は訪古志に見える求古樓宋槧本である。

掖齋の歿後、狩谷家は何の故か困窮したらしく、掖齋の

歿した翌年(天保七年)の十二月には愛藏の漢器や書物を

賣却し出したのである。始めは宋元の祕帙は留め明板以

後及び本朝圖書籍だけを賣らうとしたのである。然し後

には宋元の祕帙や本朝の舊刊本をも手放すやうになつた

のである。茲に云ふ求古樓殘書估目は宋元板、舊刊本の目録らしむ。

雜史類 清岡本貞觀政要(天保二・二・六)は清岡長親卿の花押ある本で、訪古志に載せた澁江氏所藏本の原本である。日蓮寫本貞觀政要、藏于北山本門寺藏、岳下(文政九・三・二十八)は訪古志に未見といふ。

載記類 安南志略、國人黎朗所編、清人黃丕烈藏本、臨潛研老人讀本、黃書迹可見、羽倉明府藏(天保三・六・八)は訪古志にも著録してゐる。

地理類 水經注箋、萬曆乙卯李長庚刻、朱謀瑋箋、李克家校、克家字嗣宗(天保五・一・十四)は別に珍書でもないが、訪古志に嘉靖甲午黃省曾刊本を載せてゐるのに對し、この書を代りに採録して置く。耶律楚材西遊錄、東福寺藏(文政九・三・二十八)は訪古志には載せてゐない。

政書類 唐律疏議、京師古來有寫本(天保四・一・二十九)寫本、山城屋、名例上一卷、衛禁律第三、賊盜律六卷、職制律卷三(天保九・閏四・二十三)は訪古志に見えない。律殘本、可假於小島氏(天保六・八・二十三)成齋、律

殘卷(天保九・閏四・二十六)は小島成齋(名は知足、字は子節、通稱五一、寶素とは別人)の藏する所らしいが、唐律か日本の律か不明である。

註① 版齋は古書のみならず、博く古物を愛好し、その造詣も極めて深かつた。度量權衡、錢幣、金石文に關する著作は既に人の知る所である。又日本藝林叢書に收めた藤貞幹の好古日録及び好古小録には版齋の棚外書入れをも併せ刻してあるが、之によつても金石書畫その他古物一般に對する版齋の知見の博く且つ深い事が感ぜられる。博學であるのみでなく自ら古物を蒐集したのである。それに就いて一つの挿話が儼堂の撰した版齋の墓碣銘に見える。版齋は漢鏡、漢錢、王莽の威斗、中平の雙魚洗、三耳壺を藏したので六漢老人と號した。或人がそれでは五漢だ、も一漢は何かと問うたのに對し、版齋は笑つて、身漢學を嗜む、之亦漢時の物ではないかと答へたといふ。一漢亡んで他の五漢も分散の運命に逢つたのである。日歴天保七・十二・二十七の條

夜伊澤以書報、求古後人以雙魚洗、三耳壺、威斗、漢鏡六七面、求三百金、

伊澤は椿軒、求古後人は版齋の嗣子懷之である。日歴には續いて

此漢器、鏡及漢錢、版翁之所以號六漢老人也

といふ。この内、雙魚洗と三耳壺と鏡鑑は濱松侯が買った。天保八・十二・二十七の條に三平(即懷之)之困少救焉と些か安堵してある。漢錢は懺堂から掛川侯に購入を勧めたが價高きに過ぐるとの理由で蹴られた。それで一晚寝られず翌日漢錢七品を懐之に還す。懺堂は求古後人之困可想也と記してある。天保八年の大晦日の事である。

②

賣書の事に就いては天保七・十二・二十四に小鳥子(即成齋)來、諗求古樓賣書、爲之不寢、徹曉といひ、その翌日には入求古樓、面阿高則與小鳥語小異、主人欲留宋元秘帖、賣明板以後及本朝圖書籍、才須三百金……高云將以明日送目錄、辭去

といふ。阿高は掖齋の女、主人は狩谷家の當主懷之である。その翌日約束の書目至らず夜に入つて懊惱すと記す。その翌廿七日に至り伊澤樺軒が書目を持來り求古賣書の事を謀る。漢籍が十三貫七百四十匁、和書が四貫三十四匁、通計二百九十六兩といふ。さきの才須三百金とあるに相當する。内閣文庫、靜嘉堂文庫等に求古樓書目なるものが藏せられてある(書誌學四卷六巻にも録印す)が、それには「宋元秘帙」が見えず(たゞ佛書の中に宋板の五燈會元と元板の景德傳燈錄あるのみ)和書、漢籍を雜載してある。川瀬一馬氏も掖齋歿後の編目と推察されてあるが、更に日歷に掖齋の女阿高が送届ける事を約し、樺軒が持來つたといふ賣書目錄に比定し得ないだらうか。この書目に漏れた宋元秘帙も

翌年正月には賣却されかゝつたのである(日歷天保八正十七)

四

子部儒家類 掖齋有書、以宋板荀子附回使(文政九・七・八)は訪古志に載する掖齋藏宋槧大字本である。掖齋說苑永樂本(文政八・八・四)も訪古志に見ゆ。

過金華堂、得迷樓二友所校羣書治要、福山鹽田屯所寫(天保七・七・三)

と云ふ迷庵、掖齋の校した羣書治要是、川瀬一馬氏の齋自筆本解説(書誌學四卷六號)にもその識語が採録されてあるが、川瀬氏のよられた靜嘉堂所藏本は自筆本であり、懺堂が書肆金華堂を過つて得た本は鹽田氏の轉寫したもので、同一物ではなからう。その翌日が掖齋の一周忌であるが、「不能保其不雨」が故に(懺堂の豫感は果して的中、翌日は雨、懺堂は吾計實得と記す)飯後掖齋の墓に詣でんとして遂に掖齋に縁あるこの校本をえたのである。その翌々年の命日には余氏公羊傳の船載を報告した事前述

の如くである。奇しき因縁と言ふべきである。この群書治要校本の事を相公(掛川侯太田資始か)に語つたのか、天保七・七・十の條には「相公、群書治要校本」と記す。

法家類 宋板韓非子、昌平藏、甲藏云(天保五・正・十八)甲藏は鹽谷岩陰である。昌平覺所藏の宋板韓非子は訪古志に見えない。

農家類 過山本頤庵、留語午飯、看梅尾高山寺宋板齊民要術二冊、甚佳(天保九・七・五)訪古志にも著録す。五・八兩卷及び卷一の零殘二葉を現存すといふ。齊民要術には別に舊鈔卷子本が尾張藩にあつた。天保四・十・七に

齊民要術、尾公所藏缺一卷、金澤文庫本

とあるのがそれである。訪古志には尾張眞福寺藏とあるが、日歴に尾公所藏とあり現在も尾張徳川家の黎明會文庫に藏せられてゐるといふから、眞福寺藏は誤であらう。缺一卷は訪古志によると第三の一巻を缺くといふ。日歴には天保四・十一・三十、天保五・九・十七、天保九・九・十九にも此書を記してゐる。この尾張藩齊民要術に就いて

は尾張藩醫淺井紫山から江戸の小島寶素に報ぜられ、寶素より掖齋に、更に謙堂へ傳へられて日歴のこの記事になつたと私は想定する。①

雜家類 淮南子高注、親見君藏韓人寫本、有弘治辛酉蘆泉劉績跋尾(天保七・二・二十二)は訪古志の朝鮮國刊本淮南子に當るやうであるが、刻本と鈔本との差があつて同一書か否か判らない。たゞ訪古志には未見と記してゐるから兩者の比定は暫く置く。論衡宋本末一册缺(天保十二・四・六)は掖齋舊藏のもの、訪古志によると第二十六卷より終に至るまで闕逸すといふ。風俗通、嘉靖時本、求古樓藏(天保二・十・三)は訪古志所載の明修元大徳刊本である。

類書類 玉燭寶典十二卷、掖齋本寫昌平本、原在紅□齋、昌平本寫加州侯藏足本、佐伯本缺九月一章(天保十・八・十八)□字は栗、紅栗齋は佐伯侯毛利氏の室名である。訪古志にこの本は佐伯毛利侯獻本の一であるといふ。日歴の記事によれば、加州侯藏本が原本で、それを寫したのが佐伯侯舊藏昌平學藏本、その又寫しが掖齋本といふ。

ことになる。たゞ加州侯所藏の原本は足本であるが、それを寫した佐伯侯本は九月一章を缺いてゐるといふ。訪古志にも聞加賀侯家藏卷子足本とあつて懽堂のいふ所と一致するが、現在加賀前田家所藏本には九月一章を缺いてゐるとの事である。訪古志にも未見とあり、懽堂も實見したのでなからうから、當時に於ても九月一章は缺けてゐたらう。次に名古屋大須眞福寺藏の瑠玉集は文政十三・五・五及び天保二・正・十四に見えるが、その第十二卷を杉本望雲が影抄し來り、懽堂がそれとやはり眞福寺藏の前漢書食貨志の影抄本とを購つた事がある。(天保二・四・二十三、同七・八)瑠玉集殘本一册……秦鼎(文政十・十二・十四)も秦鼎が尾張藩儒であるから、この眞福寺本の寫してはなかつたか。村山彌市見訪、且示近購宋板蒙求、甚佳、或是妙解院藏本(文政十三・九・八)は訪古志に村山某藏宋蒙本に當る。文祿活字蒙求、此爲活字始(文政十一・九・二十七)は訪古志に著録する掖齋所藏の文祿丙申活字刊本である。

小説類 楓山古世説、若能影抄、可使人刻、掖齋(文

懽堂日歴に見ゆる經籍(森)

政八・十二・二十二)は訪古志の楓山官庫藏宋蒙本に當る。釋家類 建仁寺高麗藏、惟與緣山同(天保五・十二・十九)緣山は芝増上寺である。建仁寺高麗藏については天保六・三・十五鮮藏慧琳音義の條に

此本大將軍源義滿公嘗請大藏經於朝鮮、逮義政公之時如請送達、見善隣國寶記中、今洛東建仁寺大藏也。

とある。但しこれは元文二年獅子谷白蓮社で複製した麗藏慧琳音義の識語を引用したものである。希麟音義十卷、高麗藏、高野山刊行(文政七・二・二十五)はさきの慧琳音義と共に訪古志に著録されてゐる。梵語千字文、梵語雜名、唐人著、智證之徒將來(天保六・閏七・五)は訪古志にも著録するがその梵語雜名の方は題簽に慈覺大師將來と記すといふ。三寶名義集、東寺藏十二卷、掖齋寫來、字說也、海野石窓云(天保十三・二・十九)は訪古志に見えぬ。

註① 拙稿「新修本草と小島寶素」(東方學報京都第十一册第三分所載)參照

五

集部別集類 掖齋書來、貸陶淵集影宋本(天保四・五・

八)は訪古志の求古樓藏明刊覆宋大字本に當る。校宋本陶淵明集(天保九・八・二十九)も此書をさすのであらう。

懽堂は天保十一年即ち皇紀二千五百年の歲に此書を編臨

傳刻してゐる。韓文福井歐文藤(天保三・閏十一・三十)希軒

老人遺物、山谷詩集(天保九・八・十四)點檢山谷集、昔與

希軒論定爲宋本、今不然、蓋此方覆刻宋本也、闕五六二

卷、可惜(天保九・八・十五)希軒は大島費川。前引の求古

樓殘書估目(天保八・十二・二十六)には竹友集、宋板十兩、

玉堂類稿、西垣類稿、宋板廿五兩とあり、兩者共に訪古

志に求古樓藏といふ。竹友集は謝幼槃文集の事である。

總集類 李善注文選、東叡王府藏古本(天保十・十二・

十八)文選李善注、張伯顏刻澁江道純本、胡克家本伊澤

本(天保十一・二・二十七)張・胡兩氏刻本の事は天保十二・

五・十六の條にも記す。晋府刻本の事は天保十二・二・

十九及び三・十九に見ゆ。訪古志には掖齋藏張伯顏本を

載せてゐる。天保十二・三・二十一の條には嘉靖年間に吳

郡の袁氏が蜀大字本に依つて翻雕した六臣注文選の事を

記し、その末に

按吳郡袁氏本、余知三通、服叔養本惟有第三十卷跋二

行、澁江道純本卷廿卷卅二卅七卷四十一首尾卷四十六

卷五十六皆有跋、而掖齋本第廿卷前皆無跋題、然則其

所印出次第、掖本一、澁本二、叔養本三、竹坨所看、

又在叔養本後也、

といふ。題跋を刪改して書估が宋刊本を偽造したので、

題跋の多く存するもの程早印といふ譯である。訪古志に

も掖齋藏本を著録し、「足見此本之佳」といひ、客安書院

即ち澁江氏の本はやゝ後搦に屬す、跋文少しといひ懽堂

の記す所と合す。朱竹坨の見たもの(曝書亭集五十二に

跋あり)は鏤板畢工の年月がないから、この説からいふ

と最も後印といふ事になる。日歴には

七月十一山城屋來示、每卷無跋序、尾廣郡縣云々亦無。

とある書肆山城屋の齎した本は朱竹坨の見たものと同種

である。掖齋所藏のこの書は蔣鈞臣の舊藏であつた。(文

政十二・十二・二十三)天保十四・七・二十七の條には

宋板文選八帙六十卷、飲肥侯使侍平部良助持來、求鑿

定、每卷踏李振宜印一顆滄葦一顆、比宋崇寧本少一行、每行字數書體略同、只小半格中間、帝諱至邊溝而止、慎悖不闕筆、蓋建炎以後孝宗以前所刻、或意明初刻、邊溝二字或闕或全、

といふ。崇寧本とは先の吳郡袁氏の翻雕したものの原本、訪古志に每半板十一行、行十八字、注二十六字といふから、この飢肥侯本は每半板十行で毎行の字數は同じの譯である。懽堂は茲でも明初刻と疑つてゐるが同年八月五日の條には明らかに「明影刻文選、前簡題宋板者是」と言ひ、續いて

高八寸弱、半頁横五寸三分弱、大字十行、行十八字、小字行廿六字、第五十六卷尾題下有戊申孟夏十三日李清雕、與袁本五十六卷題名同、但彼爲二行、此爲一行異。

と記してゐる。この影刻十行本は訪古志の袁氏翻雕本の條に

萬曆中刊十行本、依是本減一行者、紙刻賤劣、不及此本遠矣。

といふものに當る。直江板文選、紹興二十八年明州盧欽跋、慶長十二丁未姑洗上旬板行畢(天保七・七・二)は訪古志の慶長丁未活字刊本である。文選集注に關しては次の如き記載がある。

長公付矢野千里、示文選集注殘本二卷、云新見公近日所得云々、信近日駭目也(天保四・五・七)

之は訪古志に賜蘆文庫藏といふものに當る。文館詞林二十卷(天保五・九・十)文館詞林、今存廿四五冊(天保十一・八・二十五)は訪古志に高野山所藏尤多、現存二十餘卷といふのに相應する。宋板古文苑九卷、影抄刻、掖齋藏(天保五・正・十八)は訪古志の求古樓藏明刊本である。訪古志には攷版式字樣、當嘉靖間依宋本重刊者といふ。客歲臘盡、得元板文章軌範七卷(天保七・正・四)は訪古志の昌平學藏元槧本の條に松崎氏石經山房又藏元刊本、乃與此同種といふ。續いて本學又藏朝鮮國刊本とあるのは、日歷同日の條にいふ林述齋の得た韓本を斥すのであらうか。求古樓殘書估目(天保八・十二・二十六)の詩人玉屑、正中板一兩二分は訪古志の求古樓藏舊刊本に當る。

醫部^① 御室藏、唐本草太素經、靈樞之元本(文政十三・

四・十七)は共に訪古志に著録する。紹興校定經史證類備

急本草圖卷、寫本傳世、圖甚妙(文政十三・正・二十五)は

訪古志の多紀氏聿修堂藏鈔本に當る。椀翁有書、送宋板

病源論三冊(文政十一・六・二十九)は訪古志の諸病源候論

に當るか。尾藩藏、聖方(天保九・九・十九)は訪古志の

尾張藩藏宋槧本大宋新修太平聖惠方である。従つて赤字

は惠である。三角典藥大允、雞峰普濟方、宋張□著、二

帙三十卷、缺數卷、綱目所引備急方在第三十卷(天保十

二・三・二十三)は三角氏とこの書との關係が判然とせぬ

が、一應三角氏がこの書を藏してゐたと解する。この書

は訪古志にも見える。赤字は鈍である。谷殷著經效產方、

宋板唐人書三卷附錄一卷、岡田屋入樂眞院、太中年人白

敏中本(天保十一・十・十七)は訪古志にも著録する。明堂

經一卷、楊上善、御寶(室カ)(天保三・閏十一・三十)は訪

古志の小島寶素所藏影寫本の原本に當る。

註① 初稿本訪古志には醫書を收録してゐないが、通行本には補遺二卷を醫部とする。枳園の嗣子校庭の自筆本には醫家類

といふ。

② 拙稿「新修本草と小島寶素」参照。

以上懋堂日歴に見ゆる經籍を訪古志の順序に排列したのであるが、單なる羅列になり了つて相互に連絡ある事情をも没却する結果になつた。例へば足利學校の藏書にしても、天保五・十・十七書肆萬笈堂より椀齋の足利書目を得て足利學校所藏古經を書留た(同年十・二十一)頃から、天保十三年刻板令が下つて捺刻書目を作り(天保十三年・九・二十一及び同年十・二十九)一方山井璞に足利學校の藏書を調査させた事(天保十三・七・二十一以下)翌年肥後侯に足利學校の宋槧五經注疏を複製する事を建言して翌十五年正月十四日允許され上村彦二郎・渡邊魯輔(山井璞の實兄)等を足利に赴かせて周易注疏・尙書注疏を借來り(天保十五・二・一)更に三浦汝楫に影抄させた事(天保十五・二・七以下)等に至るまで一聯の事柄が本文では言及する餘地がなかつた。その外、爾雅(大字本及び覆蜀本)、韓文、舊唐書は同じく天保三・閏十一・三十の條

に記されてゐるが、日歴には「八日所聞」とあり、そこで十二月八日の條を見ると、「掖翁來酌對聞京報、最詳」とあつて此等の書物は掖齋が京都で得た新知見であつた。此年の秋東大寺御寶庫が開封されたので掖齋は拜觀のため十月半江戸を發ち、閏十一月半に歸つて來たのである。この西上の節福井崇蘭館で新修本草第十五卷を書寫したことは拙稿「新修本草と小島寶素」に於て詳細に述べた所である。この新修本草の件も同じくこの十二月八日に懽堂は聞いたので日歴に「唐本草既得五本今又得一本」と記してゐる。韓文福も訪古志に昌黎先生文集、宋藥本、崇蘭館藏とあり大字本爾雅も訪古志に宋藥本、崇蘭館藏と

あつて、執れも新修本草と同じく福井丹波守の藏する所である。この爾雅は日歴に石川影抄とあり、訪古志に「此本往歲狩谷堂之借鈔藏于家」とあつて、この兩記事から天保三年秋西上の節、石川某に影抄させた事が判る。更にこの影抄本によつて天保十五年、懽堂は校讎を附しその模刻本を作つたのである。日歴に屢見する舊唐書もこの時掖齋から傳聞した書の一である。

かくの如く日歴を玩味すればその記載せる事柄も愈々推究闡明し得て興味深くなるのであるが、今はたゞ訪古志の順序に排列して一般の參考に供することとした。博雅の示致を蒙れば幸である。

(昭和十五年九月二十日稿了)